

課題
時計

「名前は片思い」

人物

篠原亜里沙 (23) 大学院生

広瀬奈々 (22) 喫茶店 従業員

吉崎進 (28) 喫茶店 マスター

○喫茶店『ジュード』・外観

商店街にならぶ喫茶店。

喫茶店は老舗風の外観で、看板は『ジュード』と書いてある。

○同・中

篠原亜里沙(23)が独り、席に座って本を読んでいる。

テーブルには、飲みかけのコーヒークップ。

亜里沙の服装は、普通の大学院生らしい恰好。しかし腕には、その服には似つかわしくない高級そうな腕時計をしている。

亜里沙、本を読む手をとめて腕時計をさわり、微笑む。

ウェイター姿の吉崎進(28)が、空になったコップに水を入れにやってくる。

吉崎「お水いりますか？」

亜里沙「え？あ、すみません。お願いします」

吉崎、コップに水を注ぎながら、

吉崎「素敵な腕時計ですね」

亜里沙「あ。：はい」

亜里沙、思わず腕時計を手で隠す。

吉崎「何で？」

亜里沙「：」

吉崎「似合うのに」

亜里沙「：ありがとうございます」

亜里沙、下をむいてしまう。

吉崎、かすかに左足を引きずりながら、

戻っていく。

亜里沙、去っていく吉崎の左足を見る。

その視線の先には、ウエイトレス姿の広

瀬菜々(22)が見える。

○(回想) ホテル・ラウンジ

外の景色がみえる明るいラウンジ。

亜里沙、ラウンジにふさわしい清楚な格

好をして、椅子に座っている。向かいに

は50代くらいのスーツを着た男性の後ろ姿がみえる。

テーブルには、亜里沙の腕にしていた腕時計がある。

男の声「喜んでくれて、うれしいよ」

亜里沙「あの、こんな高価なもの」

男の声「いいよ。君への投資だ」

亜里沙「投資？」

男の声「そのくらいの物は似合う女性だよ、君は」

亜里沙、その言葉に少し微笑む。

○喫茶店『ジュード』・中

亜里沙、腕時計をみながらその向こうにみえる吉崎の姿をみる。

吉崎はコーヒーカーップを磨いている。

その真剣な横顔をじっとみつめる、亜里沙。

亜里沙、自分の元にあるコーヒーカーップの縁をそっと指でなぞる。

○ホテル・ラウンジ

亜里沙、おしゃれた恰好でラウンジの入り口にいる。

亜里沙、待ち合わせの相手の男性をみつけ、男性の向かいの席にすわる。

笑顔で亜里沙を迎える男は、吉崎。

亜里沙「待った？」

吉崎「全然」

テーブルの上には空のコーヒークップと、書きかけの手帳。

亜里沙「嘘。待ってたでしょ」

吉崎、照れたように笑ってごまかす。

吉崎「いいんだよ、そんなの。ほら、ここ景色いいしさ」

吉崎、ラウンジからの景色をみる。

それにつられ、亜里沙も外の景色をみる。

窓いっぱい広がる緑の木々の風景。

亜里沙「私、公園とか行きたいな」

吉崎「じゃあ、いこうか？」

吉崎、席をたち、亜里沙の手をとる。
そのまま、歩き出す二人。

○公園

ラフな格好の吉崎と亜里沙、仲良く手を繋ぎながらスキップして歩く。
二人は木々の間をぬけ、ミュージカルのようにステップを踏みながら踊る。
二人は踊りつかれて、芝生の上に寝転ぶ。

吉崎 「これ、あなたにプレゼント」

吉崎、キラキラ光る小さなネックレスを渡す。

亜里沙、満面の笑顔でそれを受け取る。

○喫茶店『ジュード』・中

窓越しに風にゆれる木々が見え、光がさしこみテーブルに木陰がうつる。

吉崎は、ウエイトレスの奈々と笑顔で話をしている。

その姿をみて、下をむいてしまう亜里沙。

菜々がやってくる。

菜々「なに読んでいるんですか？」

菜々の胸元には、ネックレスが揺れている。

亜里沙「え、あの：」

菜々、ケーキをテーブルに置く。

菜々「店長から。いつもこの店に来てくれるからって」

亜里沙「え？」

菜々「（小声で）ないしょね、他のお客さんには」

亜里沙「あ、あの」

菜々「：ホントだ。素敵」

亜里沙「え？」

菜々「さつき話してたの。素敵な時計しているって」

亜里沙、腕時計を隠す。

菜々「どうして隠すの？すぐく素敵なのに」

亜里沙「…」

菜々「あなたにとっても似合ってる」

亜里沙「そんなこと、ないです」

菜々「：かわいい。照れてて」

亜里沙「なに言ってる」

菜々「あ、やっと私の顔みてくれた。うれし

い。ケーキ、本当に美味しいの。ぜったい

食べてね」

菜々、去っていく。

○同・厨房

菜々、亜里沙と同じケーキを黙々と食べている。

吉崎がやってくる。

吉崎「ケーキのおまけなんか、言ってないけど？」

菜々「いいでしょ。私がケーキ代払うんだし」

吉崎「何、考えてんだよ？」

菜々、食べているケーキを吉崎に差し出して

菜々「食べる？」

吉崎「俺の気持ち、わかってる？」

菜々「私の事が好きなんでしょ？」

吉崎「：やっぱ、こんな足の男なんて嫌か？」

菜々「なに、卑屈な真似してんの？」

吉崎「そういうところ、意地悪だな」

菜々「：そう思うなら、もうちょっと待ってよ」

菜々、吉崎から目をそらし、ケーキを食べ続ける。

○（回想）ホテル・外観

菜々が、ホテルの前を歩いている。

ガラス窓越しに、ラウンジの中がみえる。

菜々は、亜里沙と50代くらいの年配の男性が一緒にいる事に気が付く。
菜々、ホテルの中に入っていく。

○（回想）同・ラウンジ

菜々、亜里沙に気が付かれないように離れた位置で亜里沙を見ている。
亜里沙が時計のプレゼントをもらっている姿を見る、菜々。

○喫茶店『ジュード』・厨房

菜々、食べ終わったケーキ皿をみつめている。

○同・店内

亜里沙はいない。
亜里沙のいた席には、食べ残したケーキとコーヒークップがある。

○同・厨房

吉崎がやってくる。

吉崎「あの子、ケーキ残していったよ。もうこの店に来ないんじゃない？」

亜里沙、吉崎の顔をみない。

○同・店内

菜々は亜里沙の座っていた席を片付けながら、腕時計が置いてあることに気がつく。

○同・厨房

亜里沙の使っていたコーヒーカップと食べかけのケーキ、腕時計がある。菜々、亜里沙が口をつけていたコーヒーカップにそっと唇をつける。

○同・店内

イメージの中で、ケーキを囲んで、菜々と亜里沙が座っている。

菜々がフォークで差し出した自分のケ
ーキをはにかみながら食べる亜里沙。
菜々は愛おしそうに亜里沙をみる。

○同・厨房

菜々は腕時計をゴミ箱に捨てようとし
て、思いとどまる。

菜々の後ろ姿。

菜々の肩は少し震えている。 了